

## 巻 頭 言

### —時間生物学の飛翔にむけて—

深田吉孝

東京大学大学院理学系研究科

日本時間生物学会の第13回学術大会は、本年度、東京国際フォーラムにて開催されることとなりました。JR 東京駅と有楽町駅の間に位置する、都内で最も交通の便の良い東京国際フォーラムを会場として選定し、皆様に参加しやすい学術大会となるよう企画いたしました。今年はまだ、『時間生物学 (Chronobiology)』が国際生物学賞の授賞分野に選定され、日本時間生物学会にとっては誠に喜ばしい、記念すべき年になりました。受賞者の栄誉を讃えて開催される記念シンポジウムの主催を偶然にも小生がお引き受けすることになり、本学会の第13回学術大会と連続して、あるいは、両者を同時に開催する方策を探って参りました。幸いにも多くの方々のご協力を得て、今回、3日間という短い期間のなかで両者の同時開催が実現いたしました。特に、東京大学の本学会員を中心とする本学術大会準備委員の先生方、国際生物学賞選考委員各位、日本学術振興会の関係各位にこの場を借りて深くお礼申し上げます。

多くの生命現象は時間と共に変化し、時間を横軸にとる生物学的解析が重要であることは言うまでもありませんが、時間生物学は、その中でも周期性を示す生命現象を中心に扱う学問分野です。研究が最も進んでいるサーカディアンリズムは約一日周期の生物リズムで、ヒトの睡眠・覚醒をはじめ、ほぼ全ての生物が持つ極めて重要な生命現象です。したがって、サーカディアンリズム研究は本学会の重要な部分を占めていますが、研究の対象となる生物種はヒトからバクテリアまで包括し、研究手法は臨床医学から分子レベルでの基礎研究まで、更には、その応用の重要性から心理学や労働科学など広汎な分野に及ぶ多面性をもつことが特徴です。このように極めて学際性の強い研究分野であるため、本学会を母体として一年に一度開催される学術大会の果たす役割と意義は極めて高いと言えます。

この学問分野での最近の動向を見ますと、二つのことに気づきます。まず、基礎分野において時計遺伝子を中心とした分子レベルの理解が爆発的に進みつつある一方で、臨床医学や社会医学の分野では、精神疾患や時間治療、さらに身近には睡眠障害や生活習慣病とサーカディアンリズムとの接点など、医療のみならず我々の日常生活に直結するような研究分野が活発に開拓されています。このような研究の動向から、最近の本学会や学術大会では、基礎系と医学系に関する話題の二極化が目立ち始めています。今後、両者がより融合して境界領域が活性化するような方向性を探ることは、我が国における時間生物学を一層発展させるために欠かせないと思います。もう一つの動向は、マスコミの影響もあって、生物時計やサーカディアンリズムに対する日本国民の一般的理解が急速な勢いで深まりつつあることです。かつて、バイオリズムなど、一種の占いと混同されていた頃とは隔世の感があります。これは素晴らしい進歩だと思いますが、今後も、私どもの研究成果をより広く国民に理解してもらえよう努めるとともに、少年犯罪をはじめ数多くの社会問題を抱えている我が国において、必要なメッセージや有意義な提言をまとめ、これを正確に伝えることも本学会の使命だと感じています。例えば「早寝、早起き、朝ごはん」国民運動などは、本学会から巻き起こすべき活動だったように見受けられます。我が国の国民は、社会生活の知恵に対する科学的な裏付けを望むほどに意識は成熟し、この熱意に応えられるかどうか、我々の力量が問われる時期にさしかかっています。

このような背景の中で、私どもは一年に一度の学術大会が持つ重要性を心に留め、参加者の皆様がいかに学術的な交流と刺激を享受していただくかを考えて大会計画を立てております。本学会の持つポテンシャルに相応しい学術大会の開催を目指し、私どもは熱意をもって大会準備を進めておりますので、一人でも多くの皆様にご参加いただけますよう、心よりお願い申し上げます。